

日本産業衛生学会東海地方会

地方会ニュース

発行所 東海地方会ニュース編集事務局
〒 470-1192
愛知県豊明市香掛町田楽ヶ窪 1-98
藤田保健衛生大学医学部衛生学教室
電話・FAX (0562) 93-2456
発行責任者 小林 章雄

(題字 畑井 進筆)



沖縄の魔除けの力をもつ獅子シーサー。今年も良い年でありますように。

地球環境と化学物質について

村田 真理子 (三重大学大学院医学系研究科環境分子医学)



環境化学物質による地球規模の汚染により、生態系への影響のみならず、ヒトへの健康影響が懸念されています。地球環境の保護と温暖化防止が日本を含む世界の重大なテーマとなっており、「美しい星50 (Cool earth 50)」を受け、2008年7月に開催された北海道洞爺湖サミットでも二酸化炭素排出削減の目標値として、2050年までに世界全体の排出量の少なくとも50%削減を達成することを求めることが採択されたことはよくご存じのとおりです。

平成20年12月4日～6日に沖縄県宜野湾市で開催された日本環境変異原学会に出席いたしました。「コミュニケーションへヒト・環境・リスクへ」と題した大会で、いくつかの興味深い講演があり、改めて環境への取り組みの重要性を再認識しました。現在、化学物質審査規制法の見直しが行われており、従来型のハザードベース管理からリスクベース管理へと改正されるための審議が続いています。すなわち、有害性の強さ(ハザード)と曝露量との積で決まるリスクにより管理する方向性が検討されています。曝露の評価のた

めの方法として、測定データ(モニタリングデータ)が利用できる場合にはそれらを活用してヒトや生物での曝露量を推定します。産業保健分野では既に生物学的モニタリングとして実用化されている手法であり、これまでの知見の集積をリスクベース管理に活かせるのではないかと思います。

沖縄宜野湾のビーチは白い珊瑚の砂に透明な青い海でしたが、珊瑚の白化現象や沖縄古来の野生の動植物の減少など、本州と同様に環境危機にさらされているようです。三重大学では環境先進大学を目指し、環境ISO14001を2007年11月に認証取得し、環境マインドを持つ学生の育成や環境研究、社会貢献に取り組んでいます。3R(スリー・アール)運動として、生協レジ袋使用の削減(Reduce)のために三重大学エコバックを作成・配布し、放置自転車回収・修理して再利用(Reuse)する、回収した古紙からトイレットペーパーをリサイクル(Recycle)する活動を学生が中心になって進めています。地球が美しい星として次世代に受け継がれるよう、まずは身近なところから努力していきたいものです。

平成20年度日本産業衛生学会東海地方会学会を担当して

横山 和仁

(三重大学大学院医学系研究科公衆衛生・産業医学分野)

平成20年11月22日(土)に、三重大学医学部(津市)において平成20年度東海地方会学会を開催した。午前中は一般演題16題の発表が行われ、また午後には小林章雄地方会長のご挨拶に続き、基調講演、特別講演および教育講演が行われた。幸い好天にめぐまれ、約150名が参加した。学会終了後には東海地方会学術連携研究会による研修会が行われた。

一般演題では、メンタルヘルス関連の報告が10題と最多で、職場ストレスの健康影響、復職判定基準をめぐる問題、ストレス対策など、様々な問題提起と討論が熱心に行われた。また、東海地方会学術連携研究会は、地方会員の学術研究への意欲が高いにもかかわらず種々の困難があることを指摘した。さらに、事業所における産業衛生の実践活動が紹介され、意見交換が行われた。午後の講演会の詳細は、各座長が本ニュースに別途報告しているのでご覧いただきたい。

最後に、演者、座長、組織委員および参加者の皆様に厚くお礼申し上げます。また、事務局を担当した当研究分野のスタッフ・院生に感謝したい。

プログラム

日時：平成20年11月22日(土) 10:00~17:00

場所：三重大学医学部臨床第1・2講義室

〈午前の部〉

◆一般演題(10:00~12:40)

メンタルヘルス1 (10:00~11:00)
メンタルヘルス2・その他 (11:00~11:50)
産業保健活動 (11:50~12:40)

〈午後の部〉

◆講演会(13:30~16:50)

地方会会長挨拶 日本産業衛生学会東海地方会

会長 小林 章雄(愛知医科大学医学部衛生学)

◎基調講演「これからの労働衛生」(13:40~14:20)

荒記 俊一(独立行政法人労働安全衛生総合研究所)

座長：小林章雄(愛知医科大学・地方会会長)

◎特別講演1「これからの産業保健・看護」(14:30~15:10)

河野 啓子(四日市看護医療大学)

座長：和田文明(三重産業保健推進センター)

◎特別講演2「職業性ストレスの一次予防：科学的根拠と実践への

連携方策の現状」(15:20~16:00)

川上 憲人(東京大学大学院医学系研究科)

座長：小野雄一郎(藤田保健衛生大学)

◎教育講演「環境因子による発がん」(16:10~16:50)

村田真理子(三重大学大学院医学系研究科)

座長：小西泰元(三重産業医会)



一般演題発表



会場風景

基調講演「これからの労働衛生」を聴いて

小林 章雄(愛知医大・医・衛生)



荒記俊一先生は、昭和17年に設立された厚生省産業安全研究所、昭和24年に「労働省けい肺試験室」として設立された産業医学総合研究所のそれぞれの歩みと統合の経緯、現在の労働安全衛生総合研究所の概要と活動を紹介され、平成12年に現・厚生労働省の産業医学研究所長にご就任以来、身をもって体験されたこれらの統廃合の歴史を振り返って、以下の強いメッセージを送られた。すなわち、「イギリスの工場法(1833年)に源流をなす労働衛生(産業保健)と、同公衆衛生法(1947年)に発する公衆衛生は今日、その専門領域を大幅に拡大しつつあるが、両者がともに一つの学術として、社会医学としての体系にまで発展することがなければ、激動の社会にあって、その存立基盤はきわめて危うい状況にある。」というものである。私は若き日、公衆衛生学と産業衛生学のはざ間をさまざまに迷っていた折、荒記先生の「職業医学—理論と実践へのアプローチ」(1981)を読み、強い感銘を受けた。先生はこのたび、「社会医学原論」(庶飛社)を出版されるご予定であるという。ご著書では、今回の40分間という短いご講演時間の中では十分に述べられなかった数多くの論点について、鋭く示唆に富むご指摘をしておられることと確信している。



荒記俊一 先生

特別講演1 「これからの産業保健・看護」を聴いて



和田 文明 (三重産業保健推進センター)

河野啓子先生は、先ず産業保健の動向を国際的にはローベンスレポート (イギリス、1972) が提出された時代背景とレポートの意義を概観し、さらにILO第161号条約及び第187号条約

の求めるところなどから、自主的な予防活動を重視し、rule-basedからself-managementへと変化してきているとした。また国内においても、「労働安全衛生マネジメントシステムに関する指針」や「第11次労働災害防止計画」にも述べられているように、包括的な予防と事業者責任・労働者参加の枠組みをさらに普及させ、自主的活動を促進させることが期待されているとした。

このような流れを受け、日本産業衛生学会産業看護部会では「産業看護の定義」を見直し (2005.4.23) 産業看護の発展を図っているが、産業看護活動実態調査 (1988年、2001年) 結果からは、例えば安全衛生委員会への委員としての出席が24%から45%へと改善は見られるものの十分でないとし、今後は産業看護教育の充実ならびに研究の推進と同時に産業看護職の實力をさらに向上させる必要があると強調された。短時間ではあるが、産業看護の動向と課題を解りやすく説明していただいた。



河野啓子 先生

特別講演2 「職業性ストレスの一次予防：科学的根拠と実践への連携方策の現状」を聴いて



小野雄一郎 (藤田保衛大・医・公衛)

川上憲人先生 (東京大学) は、職業性ストレスの一次予防に向けた3つの基本的対策 (①組織・環境改善、②個人向け対策、③上司の教育) をめぐって、各対策 (取組み) の効果に関する科学的根拠 (エビデンス) の現状を講演された。主な内容として、ストレス対処教育やリラクゼーションなどの個人向け対策の有効性、メンタルヘルスアクションチェックリスト (MHACL) による参加型改善を含む職場の組織・環境改善の有効性、多数の部下への影響を期待できる管理監督者研修の重要性などが、多様なデザインを用いた近年の諸研究成果に基づいて指摘された。また、改善のツールがまだ不足している現状を踏まえての今後の課題として、①介入研究を増加させること、②現場で使いやすい対策を提供すること、③良い改善事例を産業衛生学雑誌に掲載し、根拠として積極的に活用することの必要性が指摘された。私は、我が国の川上先生らのグループによる研究が世界の研究、特に管理監督者研修の効果を評価する研究領域を牽引していることに頼もしさを感じるとともに、科学的根拠に基づく産業保健の諸活動が、今後一層重視されるべきであることを再確認した。

川上憲人先生 (東京大学) は、職業性ストレスの一次予防に向けた3つの基本的対策 (①組織・環境改善、②個人向け対策、③上司の教育) をめぐって、各対策 (取組み) の効果に関する科学的根拠 (エビデンス) の現状を講演された。主な内容として、ストレス対処教育やリラクゼーションなどの個人向け対策の有効性、メンタルヘルスアクションチェックリスト (MHACL) による参加型改善を含む職場の組織・環境改善の有効性、多数の部下への影響を期待できる管理監督者研修の重要性などが、多様なデザインを用いた近年の諸研究成果に基づいて指摘された。また、改善のツールがまだ不足している現状を踏まえての今後の課題として、①介入研究を増加させること、②現場で使いやすい対策を提供すること、③良い改善事例を産業衛生学雑誌に掲載し、根拠として積極的に活用することの必要性が指摘された。私は、我が国の川上先生らのグループによる研究が世界の研究、特に管理監督者研修の効果を評価する研究領域を牽引していることに頼もしさを感じるとともに、科学的根拠に基づく産業保健の諸活動が、今後一層重視されるべきであることを再確認した。



特別講演

川上憲人 先生

教育講演 「環境因子による発がん」を聴いて



小西 泰元 (三菱化学四日市)

多くの疫学的研究から、環境因子特に、喫煙、食事が重要であるのは周知のことである。米国の発がん因子の寄与度の推計では、環境性発がん因子が男女とも80%を占めている。

今回の村田教授の講演は、この環境因子による発がんのメカニズムについて自験例もまじえた内容であった。

発がんの多段階モデルにおける「イニシエーション」と「プロモーション」過程の重要性や種々の環境因子によるDNA損傷形態としてDNA付加体形成と酸化的DNA損傷、発がん物質の推定方法としてのAmes試験の有用性を国際がん研究機関 (IARC) の発がん性分類を例に挙げ、またDNA付加体形成を主とする発がん物質が活性酸素を形成し、酸化的DNA損傷が発がんにつながること、この活性酸素が内因性にも外因性にも発生し種々の生体内高分子を傷害し、がんのみならず老化の促進や神経編成性疾患のリスクを高める話、生物学的環境因子による発がんとして感染症に起因する発がんのメカニズムとして炎症細胞や感染組織から生成される活性酸素種・窒素種が発がんに関与する話など非常に興味深いものであった。また最後に炎症及び感染症からの発ガンにも触れられ、早期のバイオマーカーの開発、また発がん機構としての環境に起因するエピジェネティック異常の解析が発がんの予防や治療への応用が期待されると結ばれた。今回の教育講演を聴き、環境による発がんのメカニズムと発ガン研究の進歩を理解する上に大いに役立つものであったと感じた。



村田真理子 先生



講演風景

新春随想

一人の社員として



西ヶ谷江里 (東海旅客鉄道)

一昨年、私は意を決して会社のクラブ活動である音楽部(プラスバンド)に入部しました。演奏する楽器は、学生時代からなかなか機会に恵まれず思いを募らせていた末、社会人になってやっと始めたサクソです。始めた頃は、この遅すぎるスタートにも関わらず、ずうずうしくも「上達したらみんなと一緒に合奏する」と野望を抱いていました。そして一昨年、「よし、そろそろいいかな」と実際の能力よりもはるかに高い自己評価と、先輩部員の「初心者でも大丈夫。気軽に参加して」の一言が決め手となり、ようやくその望みを叶えることができたのでした。

当時、音楽部員の平均年齢は推定48歳でそのほとんどが男性社員。紅一点で20歳前半の女性社員がいましたが、その女性も不規則勤務のために決まった練習日には全く参加できないといったかなりシニアな、いや、シビアな部員構成でした。歓迎会を開いてくれた席で、「よくこんなオヤジくさいところに入部したね」と半分本気で驚かれたことが印象に残っています。しかし、私の見かけはうら若き乙女?ですが、中身はちゃんとしたオバサンのためか、そのオヤジくさは全く気になりませんでした。ただ困ったことは、「初心者の方もお気軽に」の一言とは裏腹に、メンバー全員が吹奏楽部の出身もしくは長い経験の持ち主で、演奏は予想以上にハイレベル。一緒に入部した吹奏楽部出身の女性部員にどれだけ助けていただいたことか。ここ最近、女性や若手の部員も増え、平成20年には社会人野球日本選手権で当社チームの応援のため大阪ドームへ遠征、結果は見事準優勝。その過程を経て音楽部としての結束もさらに強まりました。音楽と同じくらいお酒を嗜むことが大好きな部員たちが集まると、家庭内秘話や大の嫁・姑の制御法など話は尽きることがありません。そこに保健師が加わったことで、部室内が自然に禁煙になったり、練習中の飲み物がジュースからお茶に変わったり、「俺たちメタボーズ」と言って大きなお腹の自慢までしてくれました。

会社一丸となってお客様の利便性を第一に考えたさらなる安全、安定、スピード化を追求し続ける中、作業の多くは着実にオートマチック化しています。しかし、その根底を支えているのは人であるということを感じると同時に、運輸、施設、電気など様々な職能を持った社員がその力を一つに集めて列車の運行を支える当社において、職制を離れた社員同士の横の繋がりが、その一人ひとりを支える大きな力になることを実感しています。健康管理部門は、ともすれば専門機関として会社とはかけ離れたイメージを社員に抱かれてしまいがちです。人間関係の希薄化が叫ばれる昨今、社員にとって身近な存在の保健師となれるよう、専門職という立場だけでなく一社員として他の社員との関わりを大切にしていきたいと思えます。

腕の良し悪しはさておき、楽器に思いきり息を吹き込むことが私の一番のストレス解消法です。

2009年私の目標



伊藤 範子 (日本ガイシ)

新年明けましておめでとうございます。

昨年のこのページで、「脱メタボ!宣言」をした当社のN氏。秋の健康診断ではみごとに腹囲がメタボ基準を下回っていました。私も毎年元旦には、「今年は〇〇するぞ!」と秘かに小さな目標を立てるのですが、いつのまにか忘れてしまい気がつけば何もしないまま年末・・・の繰り返しでした。そこで私もN氏のようにここで何か宣言し、後に引けない状態にしておこうと思います。

1つ目は「研究活動を行う!」です。

昨年の東海地方会で「多くの学会員が、研究活動をしたという意気はあるものの、時間や予算の不足等を理由に実践できていない」、さらに「保健師等では研究が困難という回答が顕著に多い」という調査結果報告を聞き、同じように感じている方が多いのだなと少し安心したと同時に、でもやらなければ!という気持ちになりました。学会や研修会に積極的に参加して刺激を受けながら、根拠にもとづく効果的な保健活動ができるよう取り組んでいきたいと考えています。

2つ目は「行ったことのない場所へ旅をする!」です。

学生時代はバックパック1つで、1ヶ月近くユースホステルを泊まり歩いたり、社会人になってからは休みの度に各地の温泉に出かけたりしていましたが、最近のお気に入り入りは京都とニューヨークです。どちらもとても魅力的で、街を歩いているだけで幸せな気分になります。昨年初めて歩数計をつけてみたのですが、旅先では毎日2万歩以上歩いていて、驚きました。普段はほとんど運動をしない私にとって、旅は心と体の健康に効果的なようです。

まだ行ったことのないヨーロッパの国々などへの旅にもあこがれつつ、もう少し齢をとったら楽なツアーで行けばいいかなと尻込みしていましたが、今年はどこか新たな旅先を見つけてチャレンジしてみようと思います。

業務に追われて時間的余裕がない、あれもしたいのに、これもしなければいけないのに・・・と焦ったり、仕事かと思うように進まずにイライラしたりということがしばしばありますが、大好きな旅や趣味(今の趣味は写経とレース編みです!)で、ストレスを上手に解消して心穏やかに1年過ごしたいと思っています。

それでは今年もどうぞよろしくお願いたします。



大学勤務満25年にあたって

井奈波良一

(岐阜大学大学院医学系研究科産業衛生学分野)

明けましてあめでございます。今年もよろしく願い申し上げます。

さて本年3月末日に大学勤務満25年を迎えます。1974年4月、大学医学部入学にあたって医学部長から「これから先は医師過剰になります。こころえて勉学に励んで下さい。」という旨の衝撃的な訓辭を受けました。当時は1県1医大構想の下、医学部の定員が増加しつつあった時期であり、せっかく苦勞して入学したのでどうなるんだろうかと暗澹とした気持ちになりました。医師過剰の例としてイタリアの医師の転業が話題になっていました。その後、近い将来医師が過剰になるという予測の下、医学部の定員は、医療費抑制のためという理由も加わって、1986年以降2006年まで削減されてきました。大学に入学した時から今日まで、おりにふれ、いったいつになったら医師過剰の日が来るのだろうかと思っただけでした。しかし、2004年に始まった新臨床研修医制度の実施を契機に、医師、とりわけ勤務医の過重労働や不足が問題になり、これまでの医師過剰の予測に反して、医学部定員は、2007年以降、これまでとは逆に増加に転じてしまいました。将来は、どうなるか分かりませんが、当時の医学部長の訓辭は単なる悲觀論に終わり、転業をまねがれました。

1989年10月、縁あって岐阜大学に勤務することになり、1993年以降、病院勤務医の勤務状況、職業性ストレスの研究を当分野の共同研究者とともに行ってきております。1993年頃の調査では、病院勤務医の1日平均労働時間は内科医が10.9時間、一般外科医が9.3時間、整形外科医が9.1時間でした。2008年前後の調査では、教育・研究時間を含めた1日平均労働時間は、内科系医師が11.7時間、外科系医師が11.1時間でした。この結果から、1993年頃の調査では、教育・研究時間が労働時間に含まれていない可能性があるため断定できませんが、勤務医の労働時間は以前より増えていると考えられます。最近、参加した会議で厚生労働省の医系技官が、医師不足の背景として「大学医学部(いわゆる医局)の医師派遣機能の低下」、「病院勤務医の過重労働」などをあげ、他に、私見として皮肉にも「名義貸しがなくなったこと」、「国立大学や国立病院が法人化し、労働基準法が適用になったこと」をあげていたことが注目されました。今後は勤務医だけでなく、医学部定員増による大学医学部教員の過重労働が問題となるかもしれません。

昨今、衛生学、公衆衛生学分野は、大学内では劣勢にたたされ、教員が転職の危機に陥る場合もあります。しかし、上記のように将来予測はあてにならないものであり、その解決策として、今後は危機をあおるより、現在のアメリカ程、楽天的でなくても、夢を語り教員や関係者のやる気を鼓舞することが大切と考えたりしています。

「新春随想～高虎の変節、藤堂の繁栄～」



松田 元 (松田医院)

恭賀新年、今回は新春随想ということで、最近筆者が興味を覚えた歴史上の人物のことを書かせていただきたいと存じます。

干支と合致せず恐縮ですが、藤堂高虎。この武將の名前は皆様もご存知ではないでしょうか。豊臣から徳川への流れの中、1608年に伊勢津22万石に移封され、伊賀上野と津城を改修。幕末・維新まで続く伊勢津藩の藩祖。浅井長政・織田信澄・豊臣秀長・豊臣秀吉・徳川家康、等々、主君をころころ変えた変節ぶり、また大阪冬の陣で真田幸村らに、夏の陣で長宗我部盛親の部隊に喫した大敗等から、戦国の諸將に比べ人気者とは言えない武將でしょう。

されど、諸藩の取潰し相次ぐ徳川政権下、外様大名にして異例な出世を遂げ、しぶとく生き残った実力は侮れないものに思われます。

昨年は津市を中心に「藤堂高虎公入府400年」のキャンペーン展開や、小説の夕刊紙連載など、若干の注目を集めました。

その業績は、まず築城。慶長の役で宇喜多秀家らと堅固な順天後城(じゅんでんわじょう)を築城して明・朝鮮軍を寄せ付けず、国内では宇和島城・今治城・藤山城・津城・伊賀上野城、また江戸城の築城・改築を手がけた城郭建築の名人として知られています。

政治手腕の面では、津藩の藩政の基礎を築き上げたのみならず、本領の津藩の他に、会津藩蒲生家と高松藩生駒家、さらに熊本藩の執政を務め、都合160万石余を統治した実績があります。

また、武勇とともに文学、能楽、茶の湯を嗜む文化人としての一面も持ち合わせた多才な人物であったようです。

天下を望むような大それた野望はないものの、マルチタレントで海外でも活躍、転職?や幾度かの失敗を味わいつつ、したたかに生きのびた、ある意味現代的な人物と言えるのではないのでしょうか?今の日本、右肩上がりの経済成長は望むべくもなく、何かとストレスフルな世世にあって、高虎の生き様には見るべきものがあると思います。津市出身の筆者としては、いつの日か大河ドラマの主役抜擢を願う次第です。

さて、私事ながら、軸足を臨床医に転じ早くも実質5年目となりました。その間、嘱託産業医として古巣の旧松下電工改め、パナソニック電工四日市(株)に引続き関与させていただき、また他の事業所にも若干たずさわらせていただきつつ今日に到っております。結果的に自分の狭い視野を少しは広げることができ、専属産業医時代に比べ産業保健と地域保健との連続性を若干なりとも意識できるようになったのではないかと感じております。

一方、比較的变化の早い安全衛生関連法規や産業医学の最新のトレンドには疎くなってきたのかなどの危機感を抱きつつある昨今ですが、本年も何卒よろしく願い申し上げます。

学会・研究会**第1回産業衛生学術研究討論会**

齊藤 政彦 (大同特殊鋼星崎診療所)

今年の地方会総会で承認された学術連携研究会の活動の一つ「産業衛生学術研究討論会」の第一回が、平成20年9月20日に名大医学部鶴友会館で開催されました。29名と多くの方に参加していただきました。

第一部では今年6月に地方会員を対象に実施された学術関連アンケート調査の結果報告が、三菱重工(株)の石川浩二先生によってなされ、第二部では東海学園大学の武山英磨先生、スズキ(株)の新島邦行先生、(株)ジェイテクトの杉本日出子先生の3名に、それぞれ大学の研究者、産業医、産業看護職として、ご自身が学術研究を実施するにあたっての問題点を発表していただきました。

アンケート調査によっていろいろな点が明確となり、特に会員が東海地方会に期待する活動としては、研修会や学会の企画運営と並んで「学術的エビデンスの集積」という回答が多く、学術研究の推進は地方会として今後取り組むべき重要な課題と認識されました。

第二部ではそれぞれの立場で抱える問題点が浮き彫りとなり、大学、産業現場ともに多忙で余裕のない中、意欲を研究実践へつなげるような環境を整えることが不可欠と思われました。きっかけ作りを初め、研究デザイン、結果の解釈、論文としてのまとめ方など、援助を必要とする会員へ必要な手が差し伸べられるように、各会員が連携して前向きに取り組むことが求められると考えます。

第3回産業保健歯科部会研修会

間瀬 純治 (藤田保衛大・医・公衛)

平成20年11月13日(木)、とてもすがすがしい秋晴れの午後、岡崎市内にある東レ・モノフィラメント株式会社の工場見学に参加いたしました。ナイロンなどの高分子原材料から、モノフィラメントという一本の長い繊維を製造・加工する会社で、工業用繊維や研磨用ブラシ、テニスラケットのガットから歯ブラシの毛先まで、あらゆるモノフィラメント製品を製造しています。設立から45年をかぞえ、品質管理のISO9001および環境保全のISO14001を取得し、国内外に知られる一大企業です。従業員200人が3交代制で24時間365日操業に携わっています。また、敷地内にある2つの関連子会社では、工場で作られた約4mの繊維の束を、歯ブラシ用に4cmの長さに切る作業や、毛束の両端の毛先をオリジナルの化学処理でテーパ加工している工程も見学させていただきました。

安全衛生に関しては、個人安全宣言活動や、3S(整理・整頓・清掃)チャンピオン活動、指差し声出し運動、危険ポイント指摘運動、ベルバト対話活動(安全衛生啓発のためにベルを鳴らしながらパトロール)の積極的な取組みに加え、従業員全員の挨拶の励行に感激しました。

産業衛生の現場を知る上で、貴重な体験でした。今回が、初めての参加でしたが、同行した先生はとても気さくな方ばかりで、あっという間に時間が過ぎてしまいました。今回、参加ができなかった方は、ぜひ次の機会にご参加ください。

第73回職場ストレス研究会

柴田 英治 (愛知医大・医・衛生)

本研究会はこしばらく講演会形式で行われてきたが、今回の特徴はグループ討論を交えた参加型グループ討論を取り入れたことであつた。これは世話人をはじめとする当研究会ワーキンググループによる検討の結果、打ち出されたもので、しばらく続いてきた知識伝達型の本研究会を、今後発信型の研究会としてより意義あるものにすることを目指したものである。

はじめに石川先生からメンタルヘルス事例の提示があり、数点のディスカッション内容が求められた。グループ分けは所属が同じ出席者を同一グループにしないという原則以外は全くのランダムで行われたため、多くのグループで初対面同士の話し合いが行われたが、各グループで議論が自然し、時間が足りず、課題の討論内容を発表するに至らない例も見られた。石川先生のコメントにもあつたが、メンタルヘルス事例の対応には様々な要因が複雑に関わっているため、答えは1つとは限らない。各参加者が身につけている知識と経験を背景に次々に意見が出されるが、講演を聴く場合と異なり、具体的に生き生きとした討論が展開された。続いて渡邊先生からの復職成功のポイントに関するまとめが行われた。

このような形態で研究会を開催することには参加者の減少などの懸念もあつたが、それも杞憂であつた。今後この形式を発展させることにより、参加者間の交流と新しい研究課題追求が可能になることを期待させるものとなつたことは、今回の研究会の重要な成果と言える。

東海地方会会員による**産業現場立脚型研究活動への期待**

杉本日出子 (ジェイテクト)

小野先生は、産業現場には多くの研究課題がある。社会的資源の観点から見て、産業の現場は経験が蓄積されPDCAサイクルで評価改善がされている。しかしこれが企業の中で留まっていいるのだろうかと思う。社会的資源を残すことは企業にとつても必要な事である。学術連携研究会の目的は、現場と大学との連携及び多専門職間の連携と協力で地方会の人材育成を行うことではないか。

産業現場立脚型研究は産業現場における諸活動の取り組みをきちんと評価し生かす事が大切である。産業保健スタッフの地位・存在価値向上に役立つ研究活動が求められているとお話されました。

医学研究の手順例として、着想、研究文献の検索→文献の批判的吟味・仮説の明確化→研究デザイン設定→研究計画書作成→倫理審査申請(承認取得)→調査・実験の遂行→結果の集計・統計解析→考察と要約→学会発表・論文の流れる、プロセスに添ってわかりやすく説明されました。

ご講演を拝聴し、産業現場で得られた知見や眠っているデータを活用した産業現場立脚型研究活動を行うこと。倫理的な検討をしっかり行うことが大切であること。研究活動が産業保健スタッフの評価につながるなど、学術連携研究会活動の意義と課題を再認識しました。

これからの諸行事予定

①第2回グローバル化と安全衛生研究会

日時：平成21年2月7日(土) 13:30~15:30
場所：中部大学名古屋キャンパス6階講義室

【話題】

- 「グローバル化の中の安全衛生—感染症を中心として—」
宮崎 豊 (豊田自動織機産業医)
- 「アジアにおける労組主導の自主的労働安全衛生トレーニング(POSITIVE)」
城 惠秀 (中部大学生命健康科学部)
- 「愛教大が進める開港途上国の技術教育支援プロジェクト」
久永直見 (愛教大保健環境センター)

参加費無料。

問い合わせ：柴田英治 eshibata@aichi-med.u.ac.jp
愛知医科大学医学部衛生学 Tel: 0561-62-3311
Fax: 0561-63-8552

②第74回職場ストレス研究会

日時：平成21年2月18日(水) 14:00~16:00
場所：明倫ホール (名古屋市中区新栄2-4-3 明倫ビル6F)
内容：※「第3回アルコール関連問題学会・産業部会」との合同開催
基調講演「アルコール関連問題の多様性と職場での対応」
西山 仁 (西山クリニック院長 日本アルコール関連問題学会評議員)
話題提供「問題飲酒に対する新しい介入の動向について」
廣 尚典 (産業医科大学産業生態科学研究所精神保健学准教授)

資料代：500円

単位：産業看護・実力アップコース：IV-3-(4)：1単位

事務局
愛知医科大学医学部衛生学講座
TEL: 0561-62-3311 (内線2371・2312) FAX: 0561-63-8552
E-mail: syokuba@aichi-med.u.ac.jp

③第22回東海産衛振動障害研究会

日時：平成21年2月21日(土) 13:00~16:30
場所：名古屋大学医学部保健学科・本館1階 T1Pセミナー室
(名古屋市中区大幸南1-1-20)

演 題：

- 「人体振動に関するEU Directiveの概略と振動障害等の防止に係わる作業管理のあり方検討会の結果との関係」
前田節雄 ((独)労働安全衛生総合研究所)
- 「手腕振動に関わるEUI指令とメーカーの対応」

- 飯山常人 ((株) マキタ)
3. 「イギリスHSE・ドイツBGI&DGUVの振動障害と騒音性難聴の予防などの取り組みについて—EUI訪問調査から—」
神田豊和 (全日本建設交運一般労働組合)
連絡先：名古屋大学医学部保健学科
樽原久孝 TEL (052) 719-1923

④第23回産業保健スタッフのための研修会

日時：平成21年3月6日(金) 10:00~16:50
場所：名城大学薬学部 新1号館7階 ライフサイエンスホール
(名古屋市中区八事山150、地下鉄八事駅徒歩8分)
参加費：東海地方会会員 4,000円、非会員 5,000円 (昼食代含まず)
定員：300名

プログラム：

- 10:00~10:10 開会の挨拶・オリエンテーション
- 10:10~11:25 講演
「企業における新型インフルエンザ対策と産業保健職の関わり」
岩田全充 (トヨタ自動車 健康支援センターウエルホ所長 統括産業医)
座長 内野文吾 (ヤマハ発動機 健康推進センター)
- 11:25~12:40 講演
「海外渡航者の健康管理」
安川隆子 (豊浜浜松病院 総合診療内科)
座長 武藤繁貴 (豊健健康診断センター所長)
- 12:40~12:50 指定発言
佐藤理之 (愛知県歯科医師会理事)
- 14:00~15:15 講演
「認知症の予防と治療—その基本的理解と産業保健的対応について—」
柳 悠 (認知症介護研究・研修大学センター長、名古屋第二赤十字病院名誉院長)
座長 齊藤政彦 (大同特殊鋼 星崎診療所)
- 15:30~16:45 講演
「非正規労働と健康」
矢野栄二 (帝京大学医学部 衛生学公衆衛生学教授)
座長 石川浩二 (三菱重工業 大江西・飛鳥健康管理科)
- 16:45~16:50 閉会の挨拶

研修単位 (申請中)：

日本医師会認定産業医研修会
日本産業衛生学会産業看護継続教育システム実力アップコース
中央労働災害防止協会T1P指導者レベルアップ研修単位
事務局：愛知医科大学医学部衛生学講座内 日本産業衛生学会東海地方会事務局
〒480-1195 愛知県愛知郡長久手町岩作雁又21
Tel&Fax 0561-62-3580

<p>財団法人 愛知健康増進財団 会 長 川 口 文 夫 〒462-0844 名古屋市中区清水一丁目18番4号 TEL(052)951-3331</p>	<p style="font-size: 2em; font-weight: bold;">謹 賀 新 年</p> 	<p>医療法人 愛知集団検診協会 愛知健診所 〒496-0048 津島市藤里町2-3-1 TEL (0567) 26-7328 FAX (0567) 26-7994</p>
<p>株式会社 あまの創健 代表取締役社長 大 森 幹 彦 〒461-0001 名古屋市中区泉2丁目20-20 TEL(052)931-0101 FAX(052)932-1745</p>		<p>財団法人 岐阜県産業保健センター 理事長 佐分利 錬 尔 診療所長 加 藤 保 夫 〒507-0801 多治見市東町1丁目9番地の3 TEL(0572)22-0115</p>
<p>医療法人 光生会病院 健診センター・先端画像センター 〒440-0045 豊橋市吾妻町137番地 TEL (0532) 61-3166 FAX (0532) 63-5407</p>		<p>医療法人 社団卓和会 しらゆりクリニック健診センター 理事長 由 利 卓 也 〒442-0013 豊川市大堀町77番地 TEL0533-86-1515 FAX0533-86-1247</p>
<p>財団法人芙蓉協会 聖隷沼津健康診断センター 所長 伊 藤 孝 〒410-8580 沼津市本字下一丁目895-1 TEL (055) 962-9882 FAX (055) 952-1019</p>		<p>社団法人 瀬戸健康管理センター 理事長 加 藤 庄 平 診療所長 坪 井 靖 治 〒489-0809 瀬戸市共栄通1丁目48番地 TEL (0561) 82-6194 FAX (0561) 85-2466</p>

地方会理事会

2008年度 第2回理事会

日 時：2008年9月6日(土) 10:00～

場 所：中部大学名古屋キャンパス6階610講義室

出席者：理事33名、監事1名、顧問1名、委任状34名

【議題】

A. 前回理事会議事録の確認

B. 報告事項

- 1) 本部報告事項 2) 地方会事務局報告事項 3) 平成20年度総会並びに研修会開催報告 4) 愛知県医師会産業保健部報告 5) 2008年役員選挙について 6) 平成20年度地方会学会準備状況 7) 第23回産業保健スタッフのための研修会準備状況 8) 地方会本部報告 9) 地方会ニュース編集状況 10) 関連学会・研究会開催報告 11) 今後の学会・研究会等 12) その他

C. 協議事項

- 1) 平成21年度地方会総会並びに研修会について 2) 平成21年度地方会学会について 3) その他

会員の異動

(2008.8.1～2008.11.30)

【新入会】 愛知①藤丸郁代(中部大) ②畑中三千代(日本たばこ産業) ③三浦裕次(愛知医大) ④清水真弓(トヨタ自動車) ⑤水野光仁(協立総合病院) ⑥丹羽克誌(丹羽歯科医院) ⑦加藤貴人(木下歯科) ⑧牧野彩(富士通) 静岡①野上愛里子(静岡大) ②洲崎好香(順天堂大附属静岡病院) ③中野雄一郎(スズキ) 三重①岸世田智明(三重県立志摩病院) ②酒向俊治(鈴鹿医療科学大) 岐阜①黒田真紀(下呂市立金山病院) ②西尾彩奈(須田病院)

【転入】 愛知①服田政信(名市大) (近畿から) 静岡①赤津順一(中部電力) (関東から) ②古橋英美(聖隷予防検診センター) (関東から)

【転出】 愛知①清永英利(JR東海健康管理センター) (北陸甲信越へ) 静岡①宮田たみ恵(富士フィルム) (近畿へ) ②鈴木正夫(NITTE東日本伊豆病院) (関東へ) 三重①保田和之(近畿健康管理センター) (近畿へ) ②松本大樹(東芝) (北海道へ) 岐阜①服部公彦(パナソニックエ

レクトロニックデバイス) (近畿へ)

【退会】 愛知①伊藤里奈(名城大) ②中野一子(藤田保健衛生大病院) ③榎原卓也(東海理化) ④阿部克之(温熱クリニック) ⑤黒谷万美子(愛知学泉大) ⑥青山典裕(全国士建業保組合中部健康管理センター) 三重①余藤孝(三重大) ②高田晴子(鈴鹿医療科学大)

編集後記

1989年、私は西ドイツ(当時)を訪問し、東ベルリンに列車で入った。列車内にはスコップとバケツを持った多くの人々がいた。ベルリンの壁崩壊とソビエト連邦消滅後、新自由主義が世界政治を完全に覆ったかのように見えた。しかし、最近の世界的金融危機によって、誰の目にも新自由主義の崩壊としての投機的資本主義が反社会的であることが明らかとなった。フランスと米国の大統領が投機的資本主義を批判する時代になったのである。次の20年間に私たちは何を見ることが出来るだろうか。必要なことは悲観や絶望ではなく、どのように力を合わせてこの危機に対処するかであり、それを可能にする理性とヒューマニズムである。

(市原 学)

次回発行 平成21年5月1日(第76号)

編集責任者 谷藤 弘茂(藤田保健大)

編集委員(五十音順)

- 石川浩二(三菱重工) 市原 学(名城大)
- 榎本美香(岐阜県立看護大) 榎原 毅(名市大)
- 高崎正子(東芝四日市) 西谷直子(東レ愛知工場)
- 武藤繁貴(聖隷健診センター) 飯邊美寿律(愛知医大)

私たちは、利用者の皆様と力を合わせてお一人おひとりの健康の実現を支援します。

定期健康診断・人間ドック・PET健診
(豊原診療センターのみ)



予約センター
0120-938-375

(社福) 聖隷福祉事業団 聖隷保健事業部

聖隷予防検診センター 所長 福田 崇典
〒433-8558 浜松市北区三方原町3453-1 TEL(053)439-8161
聖隷健康診断センター 所長 武藤 繁貴
〒430-0906 浜松市中区住吉2-35-8 TEL(053)473-5506



医療法人 名翔会
名古屋セントラルクリニック

〒457-0071 名古屋市中区千種通7-16-1
TEL(052)821-0090 FAX(052)824-0655



社団法人
半田市医師会健康管理センター

所長 春田 和 廣

〒475-8511 半田市神田町1-1 TEL(0569)27-7881

謹賀新年
平成二十一年元日

医療法人 九愛会
中京サテライトクリニック

理事長 南 圭 介

〒470-1101 愛知県豊明市香掛町石加180番地の1
TEL (0562) 93-8225(代) FAX (0562) 93-0938

(医) 豊昌会
豊田健康管理クリニック

〒473-0907 豊田市竜神町新生151番地2
TEL(0565)27-5550 FAX(0565)27-5036



医療法人 大医会
日進おりど病院
予防医学推進・研究センター

〒470-0115 日進市新戸町西田面110番地
TEL 0561 (73) 7771 FAX 0561 (73) 6140

